

まち会だより

'05

夏号

発行：特定非営利活動法人 調布まちづくりの会
〒182-0023 東京都調布市染地 3-1-19 ハ 3-510・TEL&FAX:0424-88-4022
e-mail : machikai@annie.ne.jp http://www.annie.ne.jp/machikai/

vol. 15

「多摩川まちづくりネットワーク 2005 in 調布」が開催されました

2005年6月4日(土)に「多摩川まちづくりネットワーク2005 IN 調布」を行いました。多摩川に接する多摩地域でまちづくり活動をしている団体が集まり、景観部会がコーディネーター役になって「景観・風景・まちづくり」をテーマに交流イベントを開催しました。(記事：沖崎 6ページ参照)

「京王線鉄道敷地利用検討会」が終了しました

平成15年度、16年度と2年間にわたって行われた「鉄道敷地利用検討会」が終了し、平成17年3月に「提言書」にまとめられ、市長に提出されました。内容の主な部分は、〈基本構想〉で、それは「ゆうゆう街道～つくろう！緑豊かなみんなの空間～」という言葉に集約されました。次に〈更なる検討を要する事項〉〈調布市のランドデザインを描くために必要と思われる事項〉〈時点修正の実施〉等々、今後必要とされる重要な事項が盛り込まれました。この鉄道敷地利用事業は、調布の中心地にポツカリと生まれる空白部分をどのような形にしていこうかという遠大な計画です。20年、30年かけて行政、市民が一体となって作りあげる事業です。これからも関心を持ちつづけ、参加意欲を持ちつづけたいと思っています。(記事：検討会委員 大久保)

「調布不思議発見」【調布まちなか写真展】が国領「あくろす」に常設展示！

おしゃべりサロン「相互塾」のひとつの行事として、2001年2月と2002年8月の2回、調布市内の何気なく存在している、妙なもの、ニヤツとするもの、アレツと驚くもの、などなど……、市民から写真を募集し、その都度、全作品の展示会を開きました。遅くなりましたが、その中から、調布の姿が見える作品10点を、市民活動支援センターの展示品として、展示していただくことになりました。

(記事：森下 5ページ参照)

「三者懇談会(仮称)」に「相互塾」が参加し、協働の試みへ

みんなdeねっと、やあやあネットワーク、と相互塾の3者が共同で、何か新しいことをやらないかという考えが、昨年9月に話が出て11月に最初に集まりました。その後、3者にとどまらず、広く自由に参加できことにし、名称も変更することになっています。プロジェクトOh(オー)か？

このグループの今中心になっているテーマは、ケーブルTVの番組作りをやってみよう、ということで、「調布市民放送局(仮称)準備会」を発足させて中央大学の松野良一先生の協力のもと、番組の試作を繰り返しています。

(記事：森下 5ページ参照)

サロンネットワークの「相互塾」部会

おしゃべりサロン「相互塾」は5周年！を迎え、3月から6年目に入りました。

おしゃべりサロン「相互塾」も2月で、まる5年となり、6月は第65回を迎えました。第1回からの延べ参加者が、5年4カ月で1700人に達しました。そして、今年はサロンネットワークの2年目として、「午後のティーサロン」「数学おあそびサロン」とともに併行して動いていますが、今年はさらに「みんなdeねっと」と「やあやあネット」の皆さんとも一緒に合同で、何かを始めようと動き出しました。最初のプロジェクトとしてケーブルTV番組作りを検討しています。中央大学の松野先生にご指導をお願いし、講習会も行いました。市民活動支援センターのご好意により、「調布不思議発見」の作品を提供して、「あくろす」2階に常設展示していただいています。

第59回「相互塾」:「山に魅せられて50年」磯田武雄さん（調布エフエム（株）事務局長）

12月20日、50年にわたる山登りの経験を、学生時代の山岳部でのお話からはじまり、現在の山登り仲間の話までに及んで、美しい写真もたくさん見せていただきました。世界の長寿村を調べると、高地であり、長時間の肉体労働で、粗食の生活をしていることだそうで、それは長時間歩くことに通じ、山登りがまさにそのことを満たしている。歩けなくなると内臓にくると言われている。健康とは、脂肪は際限なく蓄積され、炭水化物は食い溜めはできず余分なものはすべて脂肪になり、減らすためには、有酸素運動が必要ですが、単純運動は飽き易い、だから山登りは良い。最後に、山登りの計画、準備、山登り中、帰宅後の楽しさについて20点ほど挙げていただいた。参加者には、楽しいひとときでした。



第60回「相互塾」:「地図と磁石は恋人同志」門傳良男さん（調布市郷土博物館館長）

1月24日、門傳さんには、SILVA（シルバ）コンパス（磁針と矢印の付いた全円分度器と進行線の入った基台からなる）を持って来ていただき、調布周辺の地図の上で、使い方を習いました。地図には、必ず、磁針方位（地図上の北と磁石の指す北のずれ）が、西（東）偏何°と書かれていることを知りました。山あるきやウォーキングで、オリエンテーリングのようなときに、地図の読み方ができるといことは大変重要なことです。門傳さんは、ひとつ進むごとに全員の方が正しく使っていることを確認するために会場内を何周もされ、来場者もワイワイ楽しく過ごすことができたため、2時間がアツという間に過ぎました。更に、18人もの方が懇親会に参加されたことです。WS的な進め方に効果があったと考えられます。



第61回「相互塾」:「音楽と私」柳平英孝さん（日本アマチュア演奏家協会会員）

2月28日、子供ころ日曜がピアノの稽古でその直前まで嫌だったが、終わった後の日曜は開放感で嬉々として遊んだ話から始まって、高校生になってからは、自ら進んで音楽に親しんだそうです。ハービーマンのフルートを聴いて、フルートに入って行ったそうです。パロックが好きで中でもテレマンで、それはパロックの即興性に富んでいるからだそうです。音楽性としてはパロックとジャズは近い存在であることを始めて理解しました。フルートがパロック時代と現在とでは違うなど楽しい話があり、圧巻は、フルート、篠笛（2種類）だけではなく、リコーダ、ひちりき（箏、雅楽の楽器）まで吹き分け、パロック音楽から



日本音楽（越天楽、平城山）まで聞かせていただいたことです。信じられないことです。また、篠笛を習ったときの先生からの伝承に

（次ページへ）



ついて、「唱歌(ショウガと読む)」の方法の話には、皆さんびっくりされたようです。柳平さんは、今日本音楽の深さにはまっているそうです。21人しか味わえなかったのはもったいないことでした。

第62回「相互塾」:「都会の森林資源『わりばし』リサイクル」わりばしリサイクルグループ「くるりん」さん

3月28日、「くるりん」の馬部さん、瀬川さん、沖田さん、江尻さんに来ていただきました。6年前に王子製紙で割り箸のリサイクルをやっていることを聞き、小川さんが始められた。3年前に小名浜合板を紹介され、木の箸から竹の箸まで広げて、年2トン以下であったのが、02年から増え始め、04年には13.5トンまで増え、今年は60トンを目指しているそうです。小名浜の工場に行き、割り箸がチップになり、パーティクルボードの製品になるまでを見学したそうです。このグループの大変さは割り箸は送料まで含めて無料なので、持ち出しであることです。ただ、工場への送料だけは市からの援助があるそうです。好きでないとできない活動だということです。最近はお前講座の依頼を受けることが多くなり、また、市外からの小学校などの問合せも増えていて、認知度も増えてきたそうです。家具の材料にとどまらず、くるりん炭(わりばし炭)などを試作して、幅を広げられているそうです。議論として二酸化炭素の発生量に注意をすべきという提案がありました。



第63回「相互塾」:「都市農業・畑からの発信」関森道子さん(農業&主婦)

4月25日、子供のころから農業憧れていた話があり、嫁いで来たころは、作物を市場に出荷していたが、今は直売が中心となり、直売店を作った。それによってお客様との交流が生まれ、安全な野菜の提供が重要であることが実感として体験されている。現在抱えている問題として、相続の問題や援農の問題について話がありました。最近市場に出す作物には生産者の名前を明記し、生産者の特徴を示すことが普通となっていて、指名されることが行われている。関森さんの話では、野菜を育てていることが、子供を育てているような気持ちになって、野菜と会話していることに気が付くそうです。畑と野菜の写真を見せていただき、和んだ雰囲気になりました。フロアからは市民農園を耕している体験者との話題の交歓があって盛り上がった。また、珍しく電通大の学生さんなど若い人が参加され、楽しい時間でした。



第64回「相互塾」:「調布を描いて40年」中川平一さん(元小学校教諭)

5月30日、中川さん自身がお作りになった詳しい資料(調布との関わり)をもとにお話いただいた。太平洋戦争の最中に新宿の生家から狛江に疎開したところから始まり、昭和20年に現在の布田に転居され、調布での生活が始まって、玉音放送を調布で聞かれたそうです。そして、昭和20年代は「公民館前(イルミネーション)」から「調布中学の校章苑」まで、17作品をスクリーンに投影されて観賞しながらお話を聞きました。昭和30年代は高校入学から、「仙川駅」から「染地の田んぼ」までの3作品をゴッホの作品の真似たというエピソードを交えてお話を聞きました。昭和40年代は染地小学校に勤務されたところから始まり、「染地の田んぼ」から「踏切付近」まで6作品について見せていただいた。昭和50年代以降は上ノ原小学校、深大寺小学校に勤務され、「上ノ原小の杉」から「中島家」にいたる11作品、平成11年には定年退職され、杉森小学校に嘱託として現在も勤めておられます。最近作としては、「品川道のケヤキ」から「納屋と桃の花」の3作品を観賞しました。その後、調布ケーブルテレビに出演されたビデオを見せていただき、中川先生の絵に対する考え方やお人柄が良く分かるものでした。そして、フロアの皆さんの感想を20数人の方が述べられ、堪能した気持ちになりました。



第65回「相互塾」:「世界の海を潜って40年」木原英雄さん(NHKテレビカメラマン)

6月27日、木原さんは、羽田沖の東京湾や松山沖の瀬戸内海での旅客機墜落事件のスクープ映像で、
(次ページへ)

TV画面の海底での飛行機の姿を見て潜水撮影の仕事に興味を持ち、40年にわたって、世界の海に取材に関わるようになった話から始まりました。シリアでハイビジョン撮影を初めて行い、世界で一つしかない中継車が拉致されてしまい、その交渉で文化の違いを知ることになり、その解決に苦労した話は考えさせられました。フロリダの大地下水脈での潜水は現地のグループから訓練を受けて行ったそうで、水深80～100米のところを横に5K米行って戻り上がるのを、実に2～5時間潜っているそうです。そのための体力維持は常に鍛えているとの話。その人たちは宇宙へ行くための訓練を行っているそうです。チベットでは、5000米の高地の湖に潜られたので、6米ほど潜ると平地と同じ気圧となり、6米潜って上がってくると、平地と高地を短時間で行き来するので高山病がどうなるか心配したが、木原さんが人体実験的に試して、何とかなった話。パラオで水深4米でカメラが動作しなくなり、撮影できなくなって、撮り直しをしたところやらせ問題になりかかったことなど興味深い話が一杯ありました。最後にダイビングのための心得として、簡単なものから難しいものまで幅が広いが、初心的なところでは、ジョギングくらいの体力で大丈夫なので、世界でも珍しい流水から珊瑚まである素晴らしい日本近海で楽しんで欲しいとのことでした。



「午後のティーサロン」も発足後、3年になり、12回を数えることになりました。

固定的なファンがあられるようになり、第1回からの参加された延べ人数は、280人になりました。

第11回「午後のティーサロン」:「懐かしのスクリーン・ミュージックを聴きながら映画の一コマを観て楽しみませんか」

1月9日、「欧州映画」を取り上げ、映像の見せ方を変えることで観やすくなりました。参加人数は31人で久しぶりに盛況でした。今回は懐かしい音楽がいっぱい、「旅情」の『ヴェニスの日』、『太陽がいっぱい』、『赤い風車』の『ムーランルージュの歌』、『刑事』の『死ぬほど愛して』、『第三の男』の『ハリー・ライムのテーマ』、『ひまわり』、『道』の『ジェルソミーナ』、『ヘッドライト』、『禁じられた遊び』、『男と女』と聞いて、50年代、60年代のヨーロッパ映画全盛時代のスクリーン・ミュージックをしんみりとした気持ちで満喫しました。



第12回「午後のティーサロン」:「映画とクラシック音楽が面白い！」

4月10日、クラシック音楽を映画に使われるとき、その効果はしっかりと深みを増すように感じられます。今回は、「2001年宇宙の旅」のR・シュトラウス『ツァラツストラはかく語りき』、『逢ひき』のラフマニノフ『ピアノ協奏曲第2番』、『愛と哀しみのボレロ』のラベル『ボレロ』、『恋人たち』のブラームス『弦楽六重奏曲第1番第2楽章』、『ベニスに死す』のマーラー『交響曲第5番第4楽章』、『プラス!』の吹奏楽『アランフェス協奏曲』、『ウィリアム・テル序曲』、『威風堂々』を映像を観ながら聞きました。比較的新しい「プラス!」は、来場者にも評判がよく、全部見られるよう要望があった。そのような機会も検討してはと感想を持ちました。



「数学おあそびサロン」: 昨年1月にスタート、宮の下図書館集會室から始まり、総合福祉センターと場所を替えてきましたが、この7月から飛田給の青少年交流館に落ち着くことになりました。

6月26日で、18回を数えることができました。会員(生徒)として定着したのは、4人となりました。特徴的なことは4人とも調布市在住ではなく、近隣の市に住んでいる子どもたちです。青少年交流館に定着することで、調布の子どもたちが来てくれるようにポスター、チラシなどのPRの方策を考えていきたい。現在の4人との出会いから考えても、最も効果があるのは口コミで伝えていくことのようにです。読者
(次ページへ)



2005年1月 総合福祉センター

の皆さんのPRをお願いします。

青少年交流館の多目的室には、薄型の大型テレビが設置されており、ビデオ再生ができるので、ビデオを利用した学習もでき、幅の広い交流が期待できます。おあそびサロンの名に相応しいことを試していきたいと考えています。また、科学系の博物館の見学も検討していきます。

「調布不思議発見」常設展5月10日にオープン！：調布まちなか写真展

5月10日に、常設展示が実現しました。国領の市民活動支援センター「あくろす」の2階にある「はばたき」に、市民活動支援センターの好意により、「調布まちなか写真展『調布不思議発見』」として展示していただきました。2001年2月と2002年8月の2回にわたり募集した作品から10点を選び、展示しています。長年の懸案が成就することになり、感激しています。是非、足を運んで、その面白さを観賞していただければ、幸いです。また、第3回「調布不思議発見」の実施に向けて検討を始めます。



「3者懇談会（仮称）」から「調布市民放送局（仮称）準備会」が発足。



松野先生の講義風景

3者懇談会は、「みんなdeねっと」の人たちから「相互塾」に、昨年9月に協働の働きかけがあり、「やあやあネットワーク」も一緒になって、昨年11月に最初の懇談会が開かれました。20人以上の人が集まり、スタートとしては盛況でしたし、参加者も当初の3者にこだわらないで、広く自由に参加できることにしました。そして、あわてずに機運が高まるのを待って、進めていこうとの合意も得られました。今年になって4月の懇談会のときに、皆さんの力を集めれば、ケーブルTVの番組作りも可能ではないかとの提案が、「みんなdeねっと」から出され、進めて見ようということでスタートしました。

一方、この懇談会の名称も、もっと適したものにしようとの声があり、その候補として、「プロジェクトOh（オー）」が挙がっています。次回の懇談会で決定されるでしょう。

ケーブルTVの番組作りのプロジェクトは、早速、7月の相互塾「市民放送局の時代」の語り手としてお願いしていた中央大学の松野良一先生に、協力をお願いしたところ快く引き受けていただきました。5月28日（土）には、まる一日をかけて松野先生と研究室の学生さん10名ほどが国領まで出向いて、番組作りの基礎の講習会を実施していただきました。番組作りのための企画、撮影、編集、完パケまでの指導を受け、夜には上映会まで行うことができました。松野先生の話ですと、市民がまったくゼロから始める例はなく、調布が初めてだとのことで、松野先生の研究テーマとしても価値があるので、お互いに協力しあって進めていくことになりました。

試作した完パケビデオと松野研究室で制作したメイキングビデオの試写会を行い、調布市、調布ケーブルTVなど関係機関にも見せて、良い評価を得たようです。今後、2度ほど番組制作の試行を進めるためにも、「調布市民放送局（仮称）準備会」を、7月3日（日）に発足させ、実現に向けて進めていくことになりました。



番組制作企画会議の様子

「調布まちなか博物館（ミュージアム）」実現に向けて、新しいサロンを考えています。

景観部会の成果を活用し、エコミュージアムの発想で、調布のお宝を探り、広く人材を求め、行政も巻き込んで進めて行きたいと考えています。会員を始め、広く関心のある方の参加・協力をお願いします。また、11月に行う市制50周年・戦後60年記念の市との共催事業「翔べ！調布」のワークショップでの成果も取り入れて、進めていきます。

6月4日(土) 国立・府中・稲城・狛江・調布の各市でまちづくり活動をしている市民、団体、専門家によるネットワークイベント「多摩川まちづくりネットワーク2005 IN 調布」を景観部会がコーディネーター役になって開催しました。

午前の部は参加者16名による「仙川のまちあるき」で、コースは仙川駅南口の街並み 寺町の通り 若葉町崖線地区・樹林保全地区 オープンガーデン・森のテラス 実篤公園 商店街 仙川駅です。

「仙川駅南口の街並み」では平成8年から始まった仙川駅南土地区画整理事業による街並みや同事業エリア東側隣接の建築家安藤忠雄設計の集合住宅、ミュージアム等の建築など仙川の新しい街並みが形成されていました。「若葉町崖線地区・樹林保全地区」では、市民の主體的な活動により保全されている国分寺崖線の樹林地があり、駅周辺の空間と対比的に豊かな自然を感じることができました。また、「オープンガーデン・森のテラス」では家の中まで招かれ、造園家であるご自宅の庭を公開したいきさつなどをお聞きすることができました。

午後の部は「景観・風景・まちづくり」をテーマにして交流イベントを行いました。まず会場の市民プラザあくろすのある高層集合住宅上階33階から調布の景観を俯瞰するイベントがあり、貴重な体験だったと好評でした。会場に移動して、参加グループによる活動報告がありました。

最初は調布から、調布市都市計画マスタープラン策定から現在に至る迄のまち会の活動について鉄矢悦朗さんが報告をしました。続いて国立からは広く国立のまちづくり活動をされている高田啓子さんが「自転車の似合うまちづくり」についての報告がありました。自転車で街を積極的に楽しみながら不法駐輪の問題も含めてまちづくりのありかたを考える活動報告でした。次に稲城からは湯浅栄理子さんが「いなぎ里山グリーンワーク」についての報告です。稲城の丘陵地には豊かな雑木林、田畑があり2003年からスタートした市民と生活協働組合東京マイコープによる活発な里山の保全活動についてのレポートでした。次は狛江から佐々木貴子さんが平成15年に市民参加によりつくられたまちづくり条例のその後について報告してくださいました。具体的なマンション建設の事例で、条例が機能した場合としない場合があるなどとても興味深く、調布も参考になるお話しでした。引き続き、府中の「府中建築文化フォーラム」から前述の湯浅栄理子さんと安部貞司さんから景観のまちづくりについての報告がありました。専門家グループらしい提案型のまちづくり活動は説得力がありました。

今回の交流イベントはお互いのグループにとってとても良い刺激になり、これからのまちづくり活動の糧となったとの声も多く頂き、景観部会の活動のスタートとして弾みのつく良い機会を得ることができました。(記事：沖崎)



仙川駅南口の街並み



樹林保全地区



オープンガーデン・森のテラス



実篤公園



33階からの調布のまちを俯瞰



各市報告

まちのバリアフリー部会

「踏み切りのバリアフリー視察」をしました

<http://www.annie.ne.jp/machikai/machino/>

京王線が地下化工事が既に始まっていますが、完成までの8～9年の間は踏み切りを利用しなければなりません。又、踏み切り内での事故が全国的に問題になっています。そこで実際に踏み切りの現場を見ようということで、5月21日に調布駅周辺の踏み切り5箇所のフィールドワークをしました。踏み切り内の歩行者用通路での人と自転車、車との接触危険、非常ベルの取付位置の問題、ベビーカーの車輪が線路に引っ掛かる、線路と踏み切り通路が直角になっていない場所での問題、聴覚障害の人への配慮の必要性、道路と踏み切りの段差による急勾配等々、実際に現場に立ってバリアフリーの視点で観察すると様々な問題点が浮き彫りにされ、とても有意義な一日でした。



西側踏み切り



東側踏み切り 01



東側踏み切り 02



視察後のミーティング



東側踏み切り 03



東側踏み切り 04

昨年12月18日に、みずほ情報総研(株)の都市・地域研究室からホームページをみてということで、まちのバリアフリー部会の活動について取材を受け、同社の発行誌にその内容が掲載される予定です。

調布市では交通環境のバリアフリー化を効率的に推進することを目的として、交通バリアフリー基本構想策定委員会が7月5日からはじまりました。部会のメンバーでもある愛沢さん(視覚障害者福祉協会から委員として)と新井さん(市民公募委員として)が策定委員として参画することになりました。部会からもお二人を通して意見が反映できるよう働きかけていきたいと思っています。

まちのバリアフリー部会がスタートして3年が過ぎ、「バリアフリーのまちづくり」という視点で調布のまちを見てみると、さまざまな問題や課題があるということがわかってきます。又、昨年5月にワークショップを行い、参加された市民の方の声を直接聞くことができました。そこで今までの私たちの活動や議論もふまえて「提言書」をまとめることにし、現在部会のメンバーで提言の内容を検討中です。この提言書により、行政への施策提言は勿論、市民の皆さんにもバリアフリーのまちづくりに関心を持って頂きたいと思っています。



まちのバリアフリー定期例会

(記事：沖崎)

ちょうふ地域通貨「さ～ら」の会近況報告

アースディ in 調布 2005 で真価？を發揮！！

環境映像祭入賞作品上映会開催

昨年に引き続き「アースディ in 調布」に参加しました。調布駅南口広場が使用できない状況で、アースディイベントの開催が危ぶまれていましたが、続けたいという声が多く、開催の運びとなりました。

今回「さ～らの会」は、アースディにふさわしい、映像を通して地球環境について考える地球環境映像祭(東京ガス(株)主催)の入賞作品上映会を企画提案し、採用されて運営を行いました。この企画は好評で、映像祭が毎年実施されていることもあり、今後も継続される予定です。今回は以下の作品が上映されました。

1. タートル・ワールド

監督：ニック・ヒリゴス(オーストラリア)1996年

2. プラスチックの家のヤドカリ

監督：ウ・リヒョウ(台湾)2003年

3. サイレント・ストーム

監督：ピーター・バット(オーストラリア)2003年

「さ～ら」だけのミニ経済圏試行

市役所前の会場では「さ～ら」だけのミニ経済圏を試行する企画が実施されました。

会場内で必要とされるボランティアが求人票として「ハッピーワーク」に掲示され、ボランティアに応募した人は、自分でできる仕事を求人票から探し出し、求人元に出向いて希望の仕事をこなします。仕事を終えたら、求人元では、求人票に完了のサインをしてボランティアに渡します。ボランティアの人は、仕事が行われたことを証明するサインされた求人票を会場内に置かれた「さ～ら銀行」に持ち込み、「さ～ら」に換金することが出来ます。「さ～ら」を手にしたボランティアの人は、隣で開かれている市場(さ～らフリーマーケット)で買い物をすることが出来ます。

「さ～らフリーマーケット」は「さ～ら」でしか買い物が出来ない市場です。



会場内のミニ経済圏では、市場に通貨を供給する「さ～ら銀行」、通貨を取得する仕組みとしての労働を紹介する「ハッピーワーク」、通貨により物を手に入れることができる市場である「さ～らフリーマーケット」の最低限の仕組みで地域通貨の体験ができるようになっています。

この仕組みは、現行通貨が介在しないため、地域通貨「さ～ら」が「通貨として使える」ことを実感できるという意味で今後有効な企画であることが実証されたと感じています。

お母さんの地域通貨会議

「さ～ら」に関わるお母さん方がいっしょに企画しているイベントを紹介します。

仮称「私のまちにも必要な場所 コミュニティカフェ・コミュニティレストラン」というタイトルで

日時 8月28日(日)13:00～

場所 あくろす・市民活動支援センター

この企画は、「自分たちが歳をとったとき、安全で健康的な食事をだれかといっしょに食べることができたら1人で元気に老いることができるかもしれない」「もうあんまりばたばたしたくない、ぼんやりお茶でも飲んでいたい」「それでも、気持ちの良い街には住んでいたい」という高齢化の進む町に住む私たちが漠然と心の中で思っていることを実現するきっかけになることを願って開催するものです。要は共に手を携えてやっていこうという気持ちとその潤滑油となるであろう「地域通貨」の役回りでしょうか。当日は、すでに各地で実践中の方々のお話が聞ける大変いい機会になるのではないかと思います。

地域通貨と地域コミュニティ

「さ～らの会」では、現在山積している地域コミュニティにおけるさまざまな問題を解決できるツールとして地域通貨が大きな役割をはたすであろうと考えています。

防犯であれば、空き巣、放火、痴漢、引ったくり、子供への誘拐、いたずら防止、防災であれば、安全なまちの点検、避難訓練、災害救助、災害救助訓練、高齢者の問題であれば、見守り、給食、健康管理、孤独死撲滅、リハビリ、介助、送迎、幼児、子供の問題であれば、保育、病気保育、一時預かり、学童保育、虐待防止、障害者の問題であれば、自立、一時預かり、介助、送迎などが、挙げられます。これらの多くの問題は、地域で互いに助け合うことで解決できるでしょう。

当初より、地域通貨の価値を認識してもらうには実践しないと考えていて、現在、それらの問題解決を実践する拠点を具体的に選定し、当面の維持費を作り出す事業の検討に着手しています。実践的なモデルを作るために、ご協力をお願いします。

(文責 尾辻)

「紫金草」—花ダイコン

小山芳雄

いま日本の春にどこにでも目につく薄紫の可憐なこの花ダイコンにはこんな古くて新しいエピソードがあります。

私共の大先輩である故陸軍薬剤少将山口誠太郎先生が、戦時下中国南京で勤務中、紫金山の麓に咲き乱れている「花ダイコン」の美しさに打たれたそうです。その種子を持ち帰り、日本の郷土で栽培し、近隣や知人の方々に種子を送り、花を増やしておられました。又、旅行には各駅停車の列車に乗り、窓から種子を撒いておられました。昭和四一年朝日新聞の「声」欄にご夫人が投書して、「日本中の人々が花ダイコンの花を見るのができたら」と、父は病床で願っています。」と。その二日後に先生は逝去されました。

この記事の反響は大きく全国から種子希望が多数寄せられ、ご遺族、関係者の方々が種子を送り続けることになりました。昭和六〇年に筑波科学万博の開催が決まり、石岡市に、先生の思いを受け継ぎたいという方たちが「平和の花ダイコンを広める会」を作られ、万博に会場される外国の方々に子袋に入れた種子と「この花の種子は故山口さんの平和を願う心が込められている」との短文を添えて配布する計画があるので、以前に配られた花の種子を送って欲しいという記事がやはり朝日の「天声人語」（昭和五九年六月十日）に出ております。

手許の『陸軍薬剤将校追想録』（平成三年八月刊）に故山口先生の記事があり、「中国より持ち帰られた種子が広く日本中に広がるきっかけとなった」と記されています。また園芸植物図鑑には中国原産で戦後に日本中に広がったと書かれたものがあります。

先生は戦時中司政長官としてジャワ島にこられ、バンドウン市の抗マラリア剤のキニーネ製造工場長となられており、私は薬剤将校として同市の軍野戦貨物支庁の衛生材料科長でキナ農園、キニーネ配給等に係わっておりました。

終戦と共に軍人・軍属他全て英軍の指示で抑留所に收容され、千数百人の作業隊員を残し、昭和二年から内地に送還されることになり、先生は早期に帰国されて、郷里で薬草の研究を続けられたと聞いております。

私も昭和二年二月に作業隊の撤収に依り四月、母国に帰ることができました。

川崎市の「麻生地域セミナーOB会」のグループ紙「まちはミュージアム・だより」に小山さんが投稿した記事。



会員の小山さん

上の記事を、春に八雲台小学校塀際に美しく咲くこの花の写真を撮ったことで昔のスクラップを探し、短文をグループ紙「まちはミュージアム・だより」に投稿した後で調査の結果、劇的な展開をしていたことが解りました。

石岡市に帰られた先生は、戦場となった南京の戦禍の跡に咲くこの草を紫金草と名付け、平和のシンボルとして日本に広げられることを望んでおられたので、先の筑波科学万博の時には約百万袋が「広める会」の方々に依って作られ、来場者に渡されたことです。

この全国に広める意思はその後もう子息の山口裕医学博士を会長とする「緑の手帖の会」が結成され、その運動が続けられ、平成九年頃には「紫金草」の歌を歌う平和運動としての合唱団も出来て、平成十四年には南京市にて日本各地から参集した大合唱団に依って組曲「紫金草」物語が「青春劇場」で千人近い観客の前で公演が実現し、「北国の春」「ソーラン節」他で一般の方々との交流に大きな反響と成果をあげることが出来ました。

この南京市に広島、長崎と並ぶ大きな中国の平和公園の建設が進められて居るこの内に「日中友好平和の紫金草花園」を作る計画も許されて、本計画推進の為、賛同される多くの日本国民からの資金募集も行われております。

先日來、荒れた反日デモ運動も南京市が平穏であったのは「南京副市長が厳としてデモ行進を許可しなかったため他の都市の行動に左右されなかったこと」でこの様な日本と中国との民間の交流があることが幸いした」と中国の友人の便りを藤沢市の一氏が朝日新聞の六月七日「声」欄の記事に「南京でデモが無かった訳は」として載せられて居ます。

調布でも今では雑草の様に扱われているこの花を「平和の花」として、咲く時期は短いですが、皆さんで心がけて町中で見られる様にしていきたいですね。

※「紫金草」：中国名「諸葛菜シヨカツサイ」

※「緑の手帖の会」事務局

茨城県東茨城郡美野里町堅倉1696・75

ファクス0299・48・1755



八雲台小塀際に咲いていた紫金草

「凸凹山公園ワークショップ 布田崖線緑地を考える市民の会」の活動

市が管理している布田崖線緑地(調布市上石原 2-49)でワークショップ、イベント、整地作業など「布田崖線緑地を考える市民の会」と市の緑と公園課が協働して緑地の保全活動行っています。

世話人の石原昌子さんが編集発行しているニュースレターを引用してその活動を紹介します。(記事:大久保)

//////// ニュースレター「緑のささやき」 2005年6月号より //////////

ホームページ 誕生! <http://blog.livedoor.jp/fgr/>

11月末、強力なメンバーのO氏の尽力で、待望のホームページができました。抜群のセンスの良さと、イメージもバッチリだし、見やすいし、大好評です。現地の様子や活動の様子を見て「行ってみたいな」という気持ちになるでしょ?

旧森部邸の跡地利用についての要望書・・・その後

調布市のアクションプランで処分対象候補地として挙げられた「上石原社会教育施設用地」について、「市民の会」の世話人が昨年11/30、長友市長宛にこれまでの活動を紹介する資料と共に「この土地の利用に関する要望書」を提出しました。

これに対し、今年1/26に回答があり、世話人3名が承って参りました。要望している土地に関しては、アクションプランの処分対象候補地からはずし、緑と公園課への管轄の移行を検討するという方向に動くことが期待できそうです。・・・と言うことは、手放しで喜んでいるわけではありません。責任重大ですよ～!

リース作り

11/28、この年最後の開放日。

沢山の子どもたちと地域の人たちが参加してくれました。現地ですつや木の実や葉っぱを見つけてきて思い思いのアレンジメントを楽しみました。

梅が咲き薫り、春をいっぱい見つけました。

2月。枝がすっきりして清々したのでしょうか、梅が息を吹き返したように沢山花を咲かせて良い香りです。ふきのとうが顔を出しています。たったひとつだけ椎茸もみごとなものが育っていました。感動です!

今回は、高台の方の木々を整理して少し見通しを良くしました。薄暗かった場所が少し明るくなりました。

木の枝工作

3月。前回切った沢山の木の枝から今回 イベントのために選んでとっておいた材料を使って工作をしました。のこぎりを使うのは初めてという子どもたちが奮闘。木を切るのって思っていたほど楽じゃない。「根性」で作り上げたかわいい「フクロウ」たちは表情も豊か。

一気に草ぼうぼう

5月。この1ヶ月間の変化がものすごい。タケノコは人の背丈以上に伸びてるし、草むらには蚊も出てきています。今回は草刈り。腰ほどまでに伸びた草をザクザクと刈っていく作業は、大変というより面白い。達成感があります。草においを嗅ぎながら、草むらから飛び出すいろいろな虫たちとご対面です。刈り取った後の原っぱにはどこからともなく鳥たちが群がってきて、地面の虫をついばんでいます。この日は、もうひとつ看板作りもやりました。カラフルで魅力的な看板ができました。



初めての梅の収穫

6 / 7 (火) 平日でしたが都合のつくメンバーでウメの収穫をしました。とれたウメは90個、2315グラム。

この夏のイベント

凸凹始まって依頼の画期的な計画があります。現地の竹を使ってそうめん流しをやるうということになりました。めんつゆを入れる器も箆も竹細工で作ります。

7/24 (実費 200 円・雨天の場合は 7/31) 午前 10 時から午後 1 時半頃まで

～ 石原昌子さんに活動についての感想を書いていただきました ～

布田崖線緑地と呼ばれているハケは若宮八幡神社をはさんで東西にわずかに残っています。私たちが「凸凹」と親しみを込めて呼んでいる場所は、さらにその中のほんの一部の緑地です。

2000年の夏から始まったこの緑地での活動は、今では少なくなったメンバーで根気よく続けられていますが、昨年からは地元付近の新しいメンバーの参加が少しずつ増えてきました。

地形が通りから奥まっけていて月1回の作業なので、活動そのものも目立たず、外から見てもその変化がわからないのですが、初めて来る人は皆、思いがけない自然空間に一様に驚かれます。

この魅力と存在をいつまでも大切に残しておきたい所です。 文：石原昌子



御塔坂橋を住民参加でデザインを！

武蔵境通り住民協議会によるワークショップ

武蔵境通り住民協議会は沿道地域の住民が、安心して暮らせる地域づくりを考えながら、新しい武蔵境通りのよりよい建設について話し合う協議会で、住民はいつからでも参加可能(まち会メンバーも参加中)。

現在、御塔坂橋景観デザインワークショップを2回開催(バルコニー設置、側面は蔦を這わせ緑化を図る等の案が出る。親柱は現在検討中。)更に検討して住民案を作成、都に要望する予定です。(記事：大河)



ワークショップで出た意見の書き込み

『草の乱』 自主上映会 ～つながりを持つ事はすばらしきこと～

主催：上映実行委員会

去る2月26日、グリーンホールで行なわれた、秩父事件を映画化した『草の乱』自主上映会は、1800人の観客動員という予想以上の成果を上げた。たとえ内容の良い作品であっても、殆ど宣伝費用をかけられない自主上映にあっては、如何に多くの人たちに知って貰うかの難しさがある。それを克服してくれたのが、実行委員各位の人脈と行動力によって広げていった、人から人への繋がり輪である。何事につけても、人のつながりを大切にしていきたいものである。(記事：宇根)

3 8 ÷ ' 3

Ç^aβ™f...β
²©« φ%£ ' ø ' æ íófMû3ÿ8¬)3 ãâÇc4

Ç^aβ- β
²©- φf£ ' ø ' æ í, _)ö'~Öφ¬ _ÇcÅrû3ÿ8

“ ìÁÓö-3»•=
±©¬φ%£ ' ø ' æ íófMû3ÿ8 {®~4
~ _í[...:Ê• øâ 4%„î m·φφÊø ÖÓÖ'Áüc_^
²©± φ £ ' ø ' æ è„βp"®~Ó 24
φÃu'æ _ËLYv4£
~ _•ÖÔv·Æ—ó4•øNì ·_C±³¬ø
» "ÒNì C±³¬-ýýýÖÓÖ'ô÷ !^

